



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	在宅人工呼吸器装着者の自立と自己責任：母親として生きる権利
Author(s)	コリー, 紀代
Citation	母性衛生, 53(3), 262
Issue Date	2012-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53106
Rights	©公益社団法人日本母性衛生学会
Type	journal article
File Information	bosei53-3_262.pdf



P1-120 在宅人工呼吸器装着者の自立と自己責任 ～母親として生きる権利～

北海道大学大学院

コリー 紀代

【はじめに】

在宅人工呼吸器装着児（者）に対する支援には、障害の「医療モデル」から「社会モデル」へのパラダイムシフトが重要である。本調査において、地域で人工呼吸器と共に生活する実態についてインタビューを実施した。

【事例の紹介】

K 氏、40 代女性。先天性疾患のため 12 歳から人工呼吸器を使用。27 歳で退院し、自立生活をはじめた 6 か月後に人工呼吸器装着者のためのネットワーク組織を設立し、現在も活動を行っている。寝台式車イスで移動し、食事は経口摂取（通常食）。7 人のヘルパーのシフト表を作り、ケアコーディネートも行う。訪問看護は利用していない。人工呼吸器の定期点検に、業者が月 1 回訪問する。パートナーがおり、娘、猫 2 匹と同居している。

【結果】

「自分は生きていちゃいけない存在だと思っていたが、『障害は個性』という言葉に出会い、当たり前、普通に生きていくんだと思えるようになった。」と自立生活を始めた経緯について語った。「人工呼吸器は車イスと同じ、生活の必需品。換気量設定など自己管理している。」と、医療的ケアに関する自己責任について述べた。育児に関し、「自分の手で世話をすることだけが子育てではない。周りの色々な人の協力を得て、育児を通して自分も成長することができる。子連れ狼で仕事をしている。」と話した。